

高倉一紀提出学位申請論文

『近世書籍文化考―著述・出版から蒐書へ―』審査要旨

論文の内容の要旨

高倉一紀氏提出の論文『近世書籍文化考―著述・出版から蒐書へ―』は、大きく二つの特色を持つ。一つは新発見の資料に基づいて近世国学の立体的な側面を論じたこと、一つは近世期の商人たちの書簡を精査して書籍を通じた文化の様相を明らかにしたことである。目次によると、「序説」に続いて、「第一部 国学者とその著述」(第一章『和歌の浦』第五冊の出現―若き宣長の歌学ノ―ト―)、第二章『古事記伝』第四帙の刊年―旧説の検討と新資料―、第三章『栗田家来簡考―土満宛本居大平書簡五通―』、第四章『神代紀葦牙』成立考

―中清書本の成立から出版まで―、第五章「岡の屋年譜考」、第六章「『三大考』論争と本居大平―本居派における『三大考』の波紋―」、第七章「山崎義故とその著述―『阿漕雲雀』自筆稿本の書誌的考察を中心として―」、第二部「近世蒐書文化論」(第一章「近世蒐書文化論の視座」、第二章「堀内広城の国学」、第三章「伊勢商人竹口家の教養と国学」、第四章「射和文庫の蔵書構築と納本」の各論と、「おわりに」「論文初出一覧」により構成されている。

近世日本の文化状況を俯瞰する時、その最も特徴的な現象の一つとして学芸の大衆化があげられる。この時代、俳諧は勿論、和歌を詠み、紀行を綴り、国学を学ぶ町人や富農は必ずしも特別な存在ではなかった。また、彼らの多くは趣味的風流や好事家的社交を享受し、貪欲に知識を吸収するディレクタントであり、伊勢の国学者である本居宣長や、同大平・同春庭等も、その延長線上に現れた勝れて近世的な知識人というべきであろう。

こうした状況下における知識人社会全体を見渡すと、そこには二つのグルー

プの存在が指摘できる。一方が例えば宣長等のような知的生産者であり、一方がその門流等に見られるような知的享受者である。そして、この二つの知識人社会をつなぐ媒体として機能した、最も重要なツールが書籍であった。このような視点から書籍に注目する時、知的生産者と知的享受者の関係は、著作者（発信者）と読者（受信・中継者）の関係に置き換えられ、書籍を仲立ちとする近世文化の新たな側面がそこに立ち現れるのである。

そのことを詳細に論じるために、本論文では近世的知識人を著作者Ⅱ発信者としての第一の知識人と、その受け皿となった読者Ⅱ受信・中継者としての第二の知識人とに区別する。その上で、先ず第一部「国学者とその著述」においては、国学者を著作者（発信者）として対象化し、彼らが如何なる状況下で、如何に著述し、また如何なる出版活動を展開したのか、近世書籍文化の出発点としての知的・芸術的生産の現場と、生産者の実態を考察している。

これに続く第二部「近世蒐書文化論」は、第一部の問題意識を更に発展させ

たもので、ここでは読者（受信・中継者）としての蔵書家に光を当てること  
近世書籍文化の有り様を明らかにする。何よりも、蔵書家こそが第二の知識人  
を代表する存在であり、彼らは学芸の享受者であると同時にその中継者として、  
近世書籍文化の展開に独自の役割を担ったのである。即ち書籍の収集は、紙に  
線や点を書写ないし印刷しただけの、物理的な（モノ）の集積に終始するとい  
うような営みではなかったこと、一旦彼らの文庫に蔵書として蓄えられた知識  
や情報は、様々な形で再び地域社会へと流れ出し、より多くの享受者を獲得す  
るに至ったことを当時の書簡を精査した上で明らかにする。第二部はこうした  
中継のプロセスに注目して、近世の蔵書家が何を集め、如何に読み、如何に伝  
えたかを考察したものである。

あらためて第一部、第二部の各章の内容を見ると、第一部の第一章「『和歌  
の浦』第五冊の出現―若き宣長の歌学ノート―」は、平成七年二月、天理大学  
附属天理図書館の未整理資料の中に見出した本居宣長自筆『和歌の浦』第五冊

を中心に、宣長の初期歌学研究の状況を窺うものである。従来全四冊とされていた同書についての通説を改めると共に、新出第五冊の執筆時期を考証により宝暦二年（一七五二）〜同十一年と特定する。また、書誌学的視点から、本居宣長記念館所蔵の宣長自筆資料「本居宣長随筆」との密接な関係を指摘している。第二章「『古事記伝』第四帙の刊年―旧説の検討と新資料―」は、『古事記伝』第四帙の刊年について、諸説を検討のうえ有力視されていた文政五年（一八二二）刊行説を否定して、新資料により同第四帙の享和三年（一八〇三）刊行を立証する。また、第五帙の刊年についても竹口直彦宛本居大平書簡により、文化九年（一八一二）の刊行を証明している。

第三章「栗田家来簡考―土満宛本居大平書簡五通―」は、天理図書館蔵「栗田土満雑集」のうちから五通の栗田土満宛本居大平書簡を取り上げ、それぞれの年紀を推定のうえ各節において以下の点を論じている。第一節では、天明三年（一七八三）夏の土満の伊勢行と、その間における伊勢・尾張鈴門との交流、

鈴木梁磨との関係等。第二節では、大平の和歌撰集『八十浦之玉』編纂当初の模様と、これに対する土満の関与について、また、土満転写本『古事記伝』及びその巻次齟齬の問題を論じ、その原因を考察している。第三節では、主に土満の入手した宣長著書板本価格の変動と、『衝口発』『麻賀能比礼』『葛花』等土満転写の経緯を明らかにする。第四節では、寛政三年（一七九一）の宣長・土満の上京と、それにもなう双林寺文阿弥坊における歌会の参加者を明らかにする。第五節では、寛政六年の和歌山における宣長の御前講義と、そのメツセンジャーとしての大平の役割、石見浜田藩儒小篠敏と土満の交流等を論じている。

第四章「『神代紀葦牙』成立考―中清書本の成立から出版まで―」では、栗田土満の代表的著書『神代紀葦牙』につき、その中清書本の成立から書名の決定、改稿本の成立、刊行事業の推移、定稿本の成立、校正刷り書入等、出版に至る過程を調査検討し、同書の初版・初刷本の刊行を文政元年（一八一八）と

特定して通説を改めている。併せて、近世の出版事業について、著者及びその協力者と書肆との関係、出版に至る具体的なプロセス等にも言及する。第五章「岡の屋年譜考」では、「岡の屋」は県門十二大家の一人に数えられ、また鈴門の重鎮でもあった遠江の国学者栗田土満の号であるが、天理図書館の「栗田土満雑集」を中心に、その他の散在する資料、先行研究等も含め、利用可能な全ての資料を調査し、可能な限り詳細な土満の年譜考証を試みている。

第六章「『三大考』論争と本居大平―本居派における『三大考』の波紋―」では、先ず文化年間（一八〇四―一八）和歌山における大平の生活の実態を窺い、当時最大の課題であった服部中庸の著書『三大考』への対応を分析して、大平における無意識的な宣長学からの離反を指摘する。第七章「山崎義故とその著述―『阿漕雲雀』自筆稿本の書誌的考察―」では、平成七年九月に出現した山崎義故の『阿漕雲雀』自筆稿本について書誌的考察を試みている。新出稿本と竹清転写本との比較、蔵書印、筆跡の検討、書誌的事項の分析等により、これを

自筆稿本と判定し、同稿本第三分冊の巻次齟齬の問題を論じる。併せて、著者の義故についても一部事跡研究を補っている。

第二部の第一章「近世蒐書文化論の視座」は、第二部全体の立脚点を明らかにするための論である。ここでは、近世中期以降に台頭した新興蔵書家の文化的・社会的機能を五つに整理し、彼らが当代の文化形成に果たした独自の役割を大観する。第二章「堀内広城の国学」は、本居大平門下で、著名な佐幕派国学者長野義言の最大の支援者でもあった堀内広城の蔵書家（第二の知識人）としての活動を検証し、その実状を探る論である。即ち、堀内家資料中に見出された蔵書目の分析を通して鈴屋学の享受者としての広城像、『古事記伝』のダイジェスト版『神代真玉光』の考察を通して中継者としての広城像、第二の知識人としては統合される二つの広城像を描写している。

第三章「伊勢商人竹口家の教養と国学」では、かつての江戸店持ちの豪商竹口家（現松阪市中万町）に残る書籍目録（嘉永四年）と、同家に伝存する国学



関係資料の調査・分析を通して、近世竹口家の人々の商人としての教養を窺い、国学享受のあり方を考察する。蔵書分析の結果、鈴屋の影響下にあつて仏教や漢学、石門心学等、国学以外の学問・思想にも寛容な文化的雑居性が特徴として浮かび上がることを論じている。

第四章「射和文庫の蔵書構築と納本」では、平成十六年三月の調査によって見出した竹口家の資料によつて、幕末の公開文庫として知られる射和文庫の蒐書活動を考察している。射和文庫の蔵書構築に果たした親族三家よりの納本の意義は大きいが、そのうちの竹口家に伝存する書誌類をもとに、慶応元年（一八六五）の竹口信義納本リストの復元を試みている。その結果として同年十月の六五〇冊にのぼる竹口家からの納本は、通俗道德書を中心として、これに仏書その他を加えた啓蒙的・実用的な書籍の大量寄贈であることが明らかにされている。なお、射和文庫を蔵書家の蔵書開放の実例として捉える一方、竹斎の文庫活動が近世蔵書家の属性ともいふべき、趣味的風流や好事家的社交の

要素を決して忌避するものではなかったことも指摘する。

### 論文審査の結果の要旨

本論文『近世書籍文化考―著述・出版から蒐書へ―』は、「序説」に述べるように、近世の書籍は知識人による著述という知的生産者の存在のみではなく、その書籍を享受する知的享受者との強い関係が見られ、この視点から近世の書籍文化を具体的に明らかにすることが目的であるという。そのために数多くの近世資料を探り、その中から新資料を発見し、今日の通説を大きく変える指摘も見られる。そのことをいくつかの事例を通して、本論文の意義を見てみたい。

その一つは、第一部第一章「『和歌の浦』第五冊の出現―若き宣長の歌学ノトト―」である。平成七年二月に天理大学附属天理図書館の未整理資料の中から本居宣長自筆『和歌の浦』第五冊を発見し、従来全四冊とされていた同書に

ついでに通説を改めるとともに、新出第五冊の執筆時期を宝暦二年（一七五二）から同十一年と特定したことである。『和歌の浦』は、昭和四十七年発行の『本居宣長全集 第十四卷』（筑摩書房）において初めて紹介され、その解説には「一連四冊の自筆稿本」とあり、これが通説としてあった。しかし、平成七年に天理大学付属図書館所蔵資料から「第五冊目」に相当する宣長自筆資料が発見された。この第五冊目を詳細に検討したところ、第一冊から第四冊には全体としての統一性が見られないこと、さらに冊次も確定出来ないものであること（冊次は『全集』刊行時に付された）が明らかになり、五冊目（百丁）は第一冊から四冊までの合計丁数（九七、五丁）をはるかに越える倍の情報量を持つものであり、これは宝暦四・五年を境に諸稿本が第五冊に集約されたものであることを明らかにしている。さらに、これが宣長歌学として成立する『排蘆小船』へと流れて行ったことも明らかにされていて、初期宣長国学を考えるための重要な発見と指摘であることは明らかである。

続く第二章「『古事記伝』第四帙の刊年―旧説の検討と新資料―」では、栗田土満宛本居大平書簡を通して記伝第四帙の刊行に関する記事を発見し、旧説を訂正する。記伝四十四卷四十四冊の内、宣長生前の刊行は一卷から十七卷までで、以降の卷は宣長没後文政五年（一八二二）に刊行されたというのが通説である。しかし栗田土満宛大平書簡から記伝四帙は享和三年刊行であること、また第五帙は竹口直彦宛大平書簡を見ると、文化九年七月に彫師の植松有信から大平に第五帙が送付されたことが記されており、これを紀伊藩主に献上したのが文化十年三月であるから、文化九年七月に刊行されたことを明らかにする。こうした新資料を丁寧に見直し、その記述の精査から刊行の状況を明らかにすることで新説が提起されるのであり、そこには疑う余地はない。

第二部第一章「近世蒐書文化論の視座」では、近世の蒐書の様相を論じる。今日、近世文学・書誌学・学芸史・思想史などの研究領域は十分に注目されているが、しかし、近世の蔵書家研究は積極的な関心の対象とはならなかったこ

とを指摘し、蔵書家が書籍の受信者・享受者であると同時に、文化的媒介者の役割を果たしており、彼らを知的消費者としての第二の知識人として位置づけるべきだとする。例えば、第二章「堀内広城の国学」では伊勢宮前村の堀内広城は製茶・酒造業を営みながらも本居大平の門人として、国学の受信者と中継者の役割を果たしていることを取り上げる。その広城の蔵書（皇學館大学所蔵）を見渡すと、『古事記伝』などを含む神道・古道関係、『令義解』などを含む法制・有職関係、『続日本紀』などを含む日本史・地誌関係、『石上私淑言』などを含む国語・国文関係資料が一千冊を越え、さらに『古事記伝』の読者として『神代真玉光』を刊行して、宣長の学問を広く流通させることになったことを明らかにする。

あるいは第三章「伊勢商人竹口家の教養と国学」では、宣長の門人で江戸にも伊勢屋などの大店を構えた豪商であった竹口家の蔵書目録を精査し、竹口家の教養と国学への関わりを具体的に明らかにする論も、緻密である。竹口家の

蔵書目録には、国学・漢学・道德・仏教・神道・地理・経済・兵法・諸芸・古典など多岐にわたる分野の書名が見られ、ここからは宣長学の中にありながらも他の学問を排除しない態度があり、そこには国学のみに拘らない文化的雑居性が認められ、それが竹口家の学風であったとする。

また、第四章「射和文庫の蔵書構築と納本」では、やはり伊勢の商人であった竹川竹斎の開設した「射和文庫」を取り上げ、その蔵書一万四千巻が公共図書館を先取るものとして創設された状況を探る中で、およそ一万巻が本人の蒐書によるも、残りは寄贈されたものであること、その寄贈者には藩主や勝海舟などがあること、中でも三千巻におよぶ寄贈者が竹斎の親族であったことを明らかにする。こうした竹斎の活動から、当該文庫が学問の文化的中継基地としての役割を果たすと共に、ここには蔵書家という領域を越えて、個人文庫の活動に新たな方向性をもたらした竹斎の理念が存在したのだと論じる。

以上のように、本論文は新発見の資料を駆使して通説の誤りを正し、また未

開拓の資料を博搜して、近世蔵書文化の様相を明らかにした。その方法は書誌学的に見ても緻密・厳密であり、文献の読みも周到である。そのことによる新見も随所に見られる。もちろんここに取り上げられた知的生産者と知的享受者との関係は、高倉氏も触れるように、さらに深く考察する必要が課題として残されている。しかしながら、本論文は今後この方面の研究において裨益するところが大きく、よって本論文の提出者高倉一紀氏は、博士（文学）の学位を授与せられる資格があるものと認める。

平成二十二年一月二十日

主査 國學院大學教授 辰巳 正明 ①

副査 國學院大學教授 豊島 秀範 ①

副査 国文学研究資料館教授 鈴木 淳 ①